

## 平成30年度研究拠点形成事業 (A. 先端拠点形成型) 実施計画書

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関:	北海道大学
(イギリス)側拠点機関:	オックスフォード大学
(スウェーデン)側拠点機関:	ウプサラ大学
(オランダ)側拠点機関:	フローニンゲン大学
(台湾)側拠点機関:	国立台湾大学
(オーストラリア)側拠点機関:	オーストラリア国立大学
(カナダ)側拠点機関:	サイモン・フレーザー大学
(ロシア)側拠点機関:	極東連邦大学

### 2. 研究交流課題名

(和文): 文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築

(英文): International Research Network for Indigenous Studies and Cultural Diversity

研究交流課題に係るウェブサイト: <https://iris.cais.hokudai.ac.jp/>

### 3. 採択期間

平成30年4月1日 ~ 平成35年3月31日

(1年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関: 北海道大学

実施組織代表者(所属部局・職名・氏名):

北海道大学・総長・名和豊春

コーディネーター(所属部局・職名・氏名):

アイヌ・先住民研究センター・教授・加藤博文

協力機関: 琉球大学、東京大学

事務組織: 北海道大学国際部国際連携課, 文学研究科・文学部事務部

#### 相手国側実施組織(拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名: イギリス

拠点機関: (英文) University of Oxford

(和文) オックスフォード大学  
コーディネーター (所属部局・職名・氏名) : (英文)  
**Institute of Archaeology・Professor・GOSDEN Chris**  
協力機関 : (英文) **University of Aberdeen**  
(和文) アバディーン大学  
経費負担区分 : **Pattern 1**

(2) 国名 : スウェーデン  
拠点機関 : (英文) **Uppsala University**  
(和文) ウプサラ大学  
コーディネーター (所属部局・職名・氏名) : (英文)  
**Department of Archaeology and Ancient History・Professor・PRICE Neil**  
協力機関 : (英文) なし  
(和文) なし  
経費負担区分 : **Pattern 2**

(3) 国名 : オランダ  
拠点機関 : (英文) **University of Groningen**  
(和文) フローニンゲン大学  
コーディネーター (所属部局・職名・氏名) : (英文)  
**Arctic Centre・Director and Professor・JORDAN Peter**  
協力機関 : (英文) **National Museum of World Cultures, Leiden**  
(和文) 国立ライデン世界文化博物館  
経費負担区分 : **Pattern 1**

(4) 国名 : 台湾  
拠点機関 : (英文) **National Taiwan University**  
(和文) 国立台湾大学  
コーディネーター (所属部局・職名・氏名) : (英文)  
**Department of Anthropology・Professor・CHEN Maa-ling**  
協力機関 : (英文) **National Museum of Prehistory**  
(和文) 国立台湾史前文化博物館  
経費負担区分 : **Pattern 1**

(5) 国名 : オーストラリア  
拠点機関 : (英文) **Australian National University**  
(和文) オーストラリア国立大学  
コーディネーター (所属部局・職名・氏名) : (英文)

National Centre for Indigenous Studies ・ Associate Professor ・ FFORDE Cressida

協力機関：(英文) Australia National Museum

(和文) オーストラリア国立博物館

経費負担区分： Pattern 1

(6) 国名：カナダ

拠点機関：(英文) Simon Fraser University

(和文) サイモン・フレーザー大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文)

Department of Archaeology ・ Professor ・ NICHOLAS George

協力機関：(英文) University of British Columbia

(和文) ブリティッシュ・コロンビア大学

経費負担区分： Pattern 1

(7) 国名：ロシア

拠点機関：(英文) Far Eastern Federal University

(和文) 極東連邦大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文)

Educational and Scientific Museum ・ Associate Professor ・ POPOV Aleksander

協力機関：(英文) Russian Academy of Science

(和文) ロシア科学アカデミー

経費負担区分： Pattern 1

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

地球社会は、技術・情報・言語の共有化が急速に進み、異文化間での交流機会が増している。その一方で人類社会は多様化し、歴史文化伝統に基盤をおいた集団的アイデンティティは強まり、文化的多様性の重要性が指摘されている。長い人類史において、文化的多様性は、生物学的に一つの種であるホモ・サピエンスが多様な地球社会に適応する中で創造した人類社会を特徴付け歴史文化遺産である。この文化的多様性を維持していくために、その多様性の基礎となっている各地域の歴史文化伝統の理解が不可欠である。その具体的な取り組みとして、各地域社会が直面する文化理解をめぐる現代的な課題の把握と、課題解決へ向けた学術的な議論の場を設け、比較研究を可能とする先端的研究拠点の形成が求められている。

本事業では、世界各地の先住民文化伝統、先住民歴史文化遺産、その今日的課題に焦点を当て、人類社会の文化的多様性の形成過程の解明を目指す。5年間の事業期間を通じて、欧米、アジア、オセアニア各地の海外研究拠点と連携した学術ネットワークを国内唯一の先住民研究センターである北大アイヌ・先住民研究センターに構築する。また若手研究者育成のためのワークショップと共同研究を展開し、各国のリーディングスカラーと連携し

た若手研究者育成のための国際共同教育研究システムを構築する。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

交流活動初年度のため該当しない。

## 7. 平成30年度研究交流目標

### ＜研究協力体制の構築＞

平成30年度は本事業の初年度であることから、各国の中核研究機関と密に連絡をとり、事業計画の共有と、事業期間を通じた若手研究者育成のための具体的なプログラムづくりを進める。

7つの海外拠点機関のうち3つの拠点機関、すなわち台湾の国立台湾大学、オーストラリアのオーストラリア国立大学、ロシアの極東連邦大学との間には、既に大学間交流協定を締結済みであり引き続き本事業の推進を通じて安定した研究協力体制を維持していく。2つの研究拠点、すなわちイギリスのオックスフォード大学とカナダのサイモン・フレーザー大学については、オックスフォード大学アジア考古学・芸術・文化オックスフォードセンターと北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの間で部局間交流協定をすでに締結している。サイモン・フレーザー大学との間では北海道大学アイヌ・先住民研究センターがサイモン・フレーザー大学に事務局をおく国際プロジェクト「文化遺産における知的財産権問題」プロジェクトの連携機関となっている。これら2大学との間では、これまでの教員と院生レベルでの研究交流と定期的なセミナーの開催を通じて研究協力体制を維持していく。そのほかの2拠点機関であるオランダのフローニンゲン大学とスウェーデンのウプサラ大学については、フローニンゲン大学との間ですでに大学院生の共同教育プログラムがスタートしており、ウプサラ大学との間では研究者交流とセミナー開催の実績を有する。これら2大学については大学間交流協定または部局間交流協定を、双方の大学の国際部とも調整を行い早い段階での締結を目指す。

また平成30年度前半期に海外7拠点機関のコーディネーターを集めた国際委員会（開催地未定）を開催し、事業機関全体を通じての交流事業の目的と最終的な成果の取りまとめについての打ち合わせを行うほか、拠点機関間の連携体制、共同研究体制についての確認を行う。

### ＜学術的観点＞

(1) 文化的多様性と先住性をめぐる議論については、共同研究R-1を通じてオックスフォード大学とサイモン・フレーザー大学を中心に他のパートナー校の研究者も交えた共同研究を進める。事業初年度である平成30年度は、研究課題の基礎的概念と地域的現象についての地域間比較を中心に共同研究を進める。とりわけオックスフォード大学との間の共同研究のテーマとしては、二つの島（ブリテン島と北海道島＜日本列島＞）の間における長期的な時間軸の中での文化伝統の連続性と非連続性を人類学と考古学がどのように捉

え、評価してきたのかを比較することから、文化的多様性の理解が考古学的時間における歴史観の形成や、民族集団のアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしてきたのかについての研究討議を行う。極東連邦大学との間では、太平洋西岸地域の多様な先住民社会の形成過程を人類学および考古学的に検証するための理論と手法についての研究討議を行う。共同研究と研究討議の結果は、会議プロシーディングとしてまとめるほか、共著論文の作成を進める。

(2) 移住・適応・統合に関する人類学および考古学的考察については、共同研究 R-2 を通じて、ウプサラ大学、フローニンゲン大学を中心に他のパートナー校のメンバーの参加を求めて、3 世紀から 8 世紀にかけて世界的に生じた「The Migration Period : 民族移動時代」の背景とその各地域社会と後の民族的アイデンティティ形成に与えた影響についての共同研究を開始する。ウプサラ大学とは北欧の先住民民族サーミとアイヌ民族の比較共同研究、フローニンゲン大学とは北極圏からシベリア極東地域の民族形成についての共同研究を開始する。これら 2 つの共同研究の下で人類の文化的行動としての移住・適応・統合という検証を評価する具体的な手法の検討、地域事例に関する基礎データの収集と評価方法についての検討をワーキンググループごとに進める。平成 30 年度の共同研究と研究討議の成果は、会議プロシーディングとしてまとめるほか、次年度以降に研究成果の刊行を目指して共著論文及び論文集の編集作業を開始する。

#### <若手研究者育成>

本プログラムでは、研究フィールドや研究領域を超えて国際共同研究を企画実施でき、新たな研究領域を創生できる若手研究者の育成に取り組む。この目標に沿って、

(1) 平成 30 年度は、夏季に北海道礼文島で開催する国際フィールドスクールと北海道大学での **Hokkaido Summer Institute** プログラムに海外の拠点研究機関からの若手研究者および大学院生を招聘し、考古学的フィールドワーク、人類学的なコミュニティベースの調査、歴史環境情報の収集と解析に関する実習を行い研究者交流と共同教育プログラムの開発を進める。平成 30 年度はオックスフォード大学、フローニンゲン大学、国立台湾大学、極東連邦大学からの大学院生の参加が確定している。フィールドスクールでは、若手研究者が中心となり、外部のアーティストを招へいした考古学とアートのワークショップを企画実施する。

(2) オックスフォード大学と平成 30 年度冬季に先住民考古学と先住民遺産活用に関する若手研究者と大学院生対象の共同授業を開始し、日本側から研究者と大学院生を派遣する。

(3) フローニンゲン大学と平成 30 年度中に 2 名の大学院生に対する共同教育プログラムを実施 (EU 財源に基づくオランダから日本への派遣)、次年度以降の新たな共同教育プログラム対象の大学院生の選考を行う。

(4) サイモン・フレーザー大学とは、サイモン・フレーザー大学が所管する大学院生国際交流プログラムを通じてカナダと日本の間でそれぞれ 2 名の派遣交流院生の選考をおこない若手研究者育成事業をスタートさせる (財源は **Queen Elizabeth Scholarship <QSU>Program**)。

＜その他（社会貢献や独自の目的等）＞

本事業を通じて得られる研究成果については、「国民との科学・技術対話」事業として北海道大学が実施する"Academic Fantasia"に参加し、高校生向けの公開講座と出張講義を行うほか、礼文島での国際フィールドスクールでは、地域住民や地元自治体や観光交通企業を対象としたワークショップを開催する。

各地域の先住民コミュニティや先住民団体との間でコンサルティング的な対話、先住民事業への貢献策を討議するワークショップを開催する。このような先住民コミュニティとのワークショップを開催では、これまで「研究する側」と「研究される側」という枠組みに二分されてきた研究者コミュニティと先住民コミュニティとの関係性を再構築することが可能となる。研究という行為に対する評価は、既存の科学的規範と先住民社会の論理の違いからも同一のものではない。研究の実施にインフォームド・コンセントが不可欠であることは周知されているが、研究が実施されるフィールドにおいては必ずしも十分な状況なく、研究領域ごとに理解の差がある。研究者がソース・コミュニティへ出向き、コンサルティング的な対話を行うことは、インフォームド・コンセントと合わせて必要不可欠かつ重要な研究実施の手続きである。

8. 平成30年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成30年度	研究終了年度	平成34年度
共同研究課題名	(和文) 文化的多様性の歴史と先住性 (英文) History of cultural diversity and indigeneity				
日本側代表者 氏名・所属・職 名・研究者番号	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授・1-1 (英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University・Professor・1-1				
相手国側代表者 氏名・所属・職 名・研究者番号	(英文) (1) GOSDEN Chris・Institute of Archaeology, University of Oxford・Professor・2-1 (2) CHEN Maa-ling・Department of Anthropology, National Taiwan University・Professor・5-1 (3) FFORDE Cressida・National Centre for Indigenous Studies, Australian National University・Associate Professor・6-1 (4) NICHOLAS George・Department of Archaeology, Simon Fraser University・Professor・7-1				
30年度の 研究交流活動 計画	1) オックスフォード大学とは、「文化的多様性の歴史と先住性」の研究課題の内、とりわけ「先住性」をめぐる人類学的、考古学的現象からの考察をテーマとした共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者				

との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、より一層の情報共有に取り組む。相手国とは平成30年度冬季に共同セミナーと若手向け共同講義を実施することで合意している。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにイギリスからの4名を26日間受入れ、共同研究と学生向けレクチャーのために研究者2名を1週間受け入れる（学生と研究者の受入経費は本事業とは別財源）。日本からは平成30年度冬季に開催するセミナーに10名の研究者を8日間派遣し、オックスフォードで開催する共同講義に日本から研究者1名を1週間派遣する。若手研究者交流派遣プログラムとして若手研究者1名を30日間派遣する。

2) 国立台湾大学とは、「文化的多様性の歴史と先住性」の研究課題の内、「先住性」をめぐる人類学的、考古学的現象からの考察をテーマとした共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、情報共有に取り組む。相手国とは、すでに平成29年12月に国立台湾大学の招聘を受けて研究集会を台北において開催しており双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールに台湾からの5名を26日間受入れ、共同研究と学生向けレクチャーのために研究者1名を1週間受け入れる（学生と研究者の受入経費は本事業とは別財源）。若手研究者交流派遣プログラムとして若手研究者1名を30日間派遣する。

3) オーストラリア国立大学とは、「文化的多様性の歴史と先住性」の研究課題の内、「先住性と知的財産権」をテーマとした共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、情報共有に取り組む。すでに平成30年1月に札幌において先住民文化遺産の所有権と返還をめぐるワークショップを別財源で開催しており、双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにオーストラリアからの2名を26日間受け入れる（学生の受入経費は本事業とは別財源）。若手研究者交流派遣（短期）プログラムとして若手研究者1名を14日間派遣する。

4) サイモン・フレザー大学とは、「文化的多様性の歴史と先住性」の研究課題の内、「先住性と知的財産権」をテーマとした共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレ

	<p>ターを作成し、情報共有に取り組む。これまでも相手国が実施するプロジェクトに連携機関、連携研究者として参加してきた実績があり、双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにカナダからの3名を26日間受入れる（学生の受入経費は本事業とは別財源）。平成30年秋にカナダ側でセミナーを共同開催し、日本側からカナダに6名を7日間派遣する。若手研究者交流派遣（短期）プログラムとして若手研究者1名を14日間派遣する。又カナダ側の大学院生交流奨学資金を活用した派遣事業の募集と選考を開始し、平成31年度の大学院生の派遣受け入れ事業の実現を目指す。</p>
<p>30年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>文化的多様性と先住性は、本事業に参画する各地域が抱える共通の課題である。平成30年度の事業の推進によって基本的に共有する課題の確認と共同研究の方向性が明確になることが期待される。また事業初年度である本年度中に5年間の事業を通じた研究成果を書籍として刊行するために、研究成果の出版計画を作成する。また日本、オックスフォード、カナダで開催されるセミナーについては、プロシーディングをデジタル版でまとめ研究成果の一時的な共有を図り将来的な刊行物の出版計画を海外の大学出版社との間で進める若手研究者の交流では、共著論文の刊行にむけた共同研究を2件スタートさせる予定である。これらの共同研究については、次年度以降に独立した財源を確保しての共同研究を実施する。</p>

整理番号	R-2	研究開始年度	平成30年度	研究終了年度	平成34年度
共同研究課題名		<p>(和文) 人類の文化的行動としての移住・適応・統合</p> <p>(英文) Migration, adaptation and integration as the human cultural activity</p>			
日本側代表者 氏名・所属・職 名・研究者番号		<p>(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授・1-1</p> <p>(英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University・Professor・1-1</p>			
相手国側代表者 氏名・所属・職 名・研究者番号		<p>(英文)</p> <p>(1) PRICE Neil・Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University・Professor・3-1</p> <p>(2) JORDAN Peter・Arctic Centre, University of Groningen・Director and Professor・4-1</p> <p>(3) POPOV Aleksander・Educational and Scientific Museum, Far Eastern Federal University・Associate Professor・8-1</p>			
30年度の 研究交流活動 計画		<p>1) ウプサラ大学とは、「人類の文化的行動としての移住・適応・統合」の内、「移住と文化統合」をテーマにサーミ民族とアイヌ民族の多角的視点からの比較研究を含めた共同研究を進める。本共同研究についての国内研</p>			



	<p>研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、情報共有に取り組む。これまでも相手国においてセミナーを実施してきた実績があり、双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにスウェーデンからの2名を26日間受入れる。また共同研究と学生向けレクチャーのために研究者1名を1週間受け入れる（学生と研究者の受入経費は本事業とは別財源）。日本側からはサーミとアイヌの比較研究のために日本側から研究者1名をウプラサ大学に1ヶ月間派遣する。加えて平成30年冬季にセミナーをウプサラで開催する予定であり、日本から8名を8日間派遣する。</p> <p>2) フローニンゲン大学とは、「人類の文化的行動としての移住・適応・統合」の内、「移住と適応」をテーマに北極圏からシベリア極東地域を対象とした共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、情報共有に取り組む。これまでも相手国においてセミナーを実施してきた実績があり、双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにオランダからの2名を26日間受入れる。また共同研究と学生向けレクチャーのために研究者1名を1週間受け入れる（学生と研究者の受入経費は本事業とは別財源）。日本側からは北極圏からシベリア極東地域の先住民社会の比較研究のために研究者1名をフローニンゲン大学に1週間派遣する。</p> <p>3) 極東連邦大学とは、「人類の文化的行動としての移住・適応・統合」の内、「生業と文化的景観の創造」をテーマに太平洋沿岸の海洋適応と独自の文化的アイデンティ形成についての共同研究を進める。本共同研究についての国内研究者との進捗状況の確認と共有はメーリングリストを通じて行なっており、平成30年4月からは電子版ニュースレターを作成し、情報共有に取り組む。平成30年度5月に相手国においてシンポジウムが予定されており、さらに北海道大学との間では学生交流や共同授業の実績があり、双方の課題共有と連絡調整は済んでいる。交流計画としては、セミナーとして実施する礼文島での国際フィールドスクールにロシア5名を26日間受入れる。また共同研究と学生向けレクチャーのために研究者1名を1週間受け入れる（学生と研究者の受入経費は本事業とは別財源）また日本側から研究者1名を共同研究と共同講義のために1ヶ月間派遣する。</p>
30年度の 研究交流活動 から得られる	<p>文化的行動としての移住・適応・統合に関する課題は、人類行動の本質に関わる中核的な研究課題である。平成30年度の事業の推進によって地域的な特性と普遍的な要素が基本的に明確になることが期待される。また</p>

ことが期待される成果	事業初年度である本年度中に5年間の事業を通じた研究成果の発信方法として研究成果の出版計画を作成する。スウェーデンで開催予定のセミナーについては、プロシーディングをデジタル版でまとめ研究成果の一時的な共有を図り、将来的な刊行物の作成準備を行う。若手研究者の交流においては、共著論文の刊行にむけた共同研究を2件スタートさせる予定であり、次年度以降の研究の進展が期待される。
------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「礼文島国際フィールドスクール」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “ International Field School in Rebun Island ”
開催期間	平成30年8月4日 ～ 平成30年8月25日 (22日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、礼文町、浜中2遺跡周辺
	(英文) Hamanaka 2 site, Rebun, Japan
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授・1-1
	(英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University・Professor・1-1

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (日本)		備考
		A.	B.	
日本	A.	10/	220	
	B.	20		
イギリス	A.	5/	111	
	B.	0		
スウェーデン	A.	3/	59	
	B.	0		
オランダ	A.	3/	59	
	B.	0		
台湾	A.	6/	137	
	B.	0		
オーストラリア	A.	2/	52	
	B.	0		
カナダ	A.	3/	78	
	B.	0		
ロシア	A.	6/	137	
	B.	0		
合計 <人/人日>	A.	38/	853	
	B.	20		

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※人／人日は、2／14（＝2人を7日間ずつ計14日間派遣する）のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	<p>本セミナーの目的は、先史時代から民族誌時代まで連続する人類居住の痕跡を多角的な手法で解析し、島環境への集団の移住と地域資源の持続可能な利用を基礎とした適応行動を復元するとともに、異なる文化伝統の接触と社会経済的な交流を通じて文化的アイデンティティが如何にして形成され民族意識の形成へと変容するのかをフィールドワークを通じて学ぶことにある。地域の豊かな研究資源を活用し、共同研究を通じて先端的な分析手法を新たに開発することも本セミナーの目的の一つである。</p>	
期待される成果	<p>異なる研究背景をもった研究者が集い、新たな研究手法の開発や未開拓の研究領域の開拓を進めること、その場に大学院や若手研究者が共同研究者として交流する機会は、多くの新たな着想と参加者に提供することができる。海外の研究者との交流を通じて、多様な研究手法を学ぶことは、次世代の研究者育成に大きく貢献することが期待できる。本セミナーでは、人文学から自然科学の複眼的な研究視点と多領域の研究手法を駆使した人類と環境との相互作用を学ぶ貴重な機会を各国から参加する大学院生や若手研究者に提供することができる。</p>	
セミナーの運営組織	<p>本セミナーは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターを事務局とし、北海道大学国際部と連携しながら、Hokkaido Summer Institute 事業の一貫として実施する。セミナーの運営主体は、北海道セミナー班のメンバー（加藤博文 1-1；平澤悠 1-8；近藤祉秋 1-9）が中心となり、他の北海道大学メンバーや協力機関の研究者の支援を受けておこなう。</p>	
開催経費 分担内容	日本側	<p>内容 日本側研究者 国内旅費 日本側研究者 国内滞在費 スウェーデン側研究者 日本国内滞在費 セミナー開催経費</p>
	イギリス側	<p>内容 イギリス側研究者 国際航空運賃 イギリス側研究者 日本国内滞在費</p>
	スウェーデン側	<p>内容 スウェーデン側研究者 国際航空運賃</p>

	オランダ側	内容 オランダ側研究者 国際航空運賃 オランダ側研究者 日本国内滞在費
	台湾側	内容 台湾側研究者 国際航空運賃 台湾側研究者 日本国内滞在費
	オーストラリア側	内容 オーストラリア側研究者 国際航空運賃 オーストラリア側研究者 日本国内滞在費
	カナダ側	内容 カナダ側研究者 国際航空運賃 カナダ側研究者 日本国内滞在費
	ロシア側	内容 ロシア側研究者 国際航空運賃 ロシア側研究者 日本国内滞在費

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「先住性と知的財産権」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Indigeneity and Intellectual Property Issues ”
開催期間	平成30年9月21日 ～ 平成30年9月23日 (3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) カナダ、バーナビー、サイモン・フレーザー大学 (英文) Simon Fraser University, Burnaby, Canada
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 近藤祉秋・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・助教・1-9 (英文) KONDO Shiaki・Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University・Assistant Professor・1-9
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) NICHOLAS George・Department of Archaeology, Simon Fraser University・Professor・7-1

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (カナダ)	備考
日本	A.	6/ 42	
	B.	0	
イギリス	A.	2/ 14	
	B.	0	
スウェーデン	A.	2/ 14	
	B.	0	
オランダ	A.	1/ 7	
	B.	0	
台湾	A.	2/ 14	
	B.	0	
オーストラリア	A.	2/ 14	
	B.	0	
カナダ	A.	14/ 42	
	B.	10	
合計 <人/人日>	A.	29/ 147	
	B.	10	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※人/人日は、2/14（＝2人を7日間ずつ計14日間派遣する）のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

セミナー開催の目的	本セミナーの目的は、さまざまな種類の先住民文化遺産の保存・管理・活用をめぐる課題について、先住権や文化遺産の所有権について具体的な事例を比較検討し、運用上で解決が求められている諸問題を共有することにある。先住民文化遺産とその知的財産権をめぐる様々な課題についてこれまで国際的な研究プロジェクトを展開させてきたカナダ側の研究者グループの実績を基礎に課題共有を図る。
-----------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

期待される成果	<p>多くの先住民コミュニティが所在するカナダ北西海岸では、大学研究機関と先住民コミュニティとの間で文化遺産の返還や共同管理など幾つもの具体的な取り組みが進められてきた。本セミナーでは他の地域における実例を比較検討することを目指す。カナダ北西海岸地域で取り組まれてきた実績を基礎としつつ、本セミナーでの議論を通じて他の地域での課題を参加研究者間で共有することで、将来的な課題解決の方向性と具体的なアプローチのモデルを見出すことが期待される。</p>	
セミナーの運営組織	<p>本セミナーは、カナダ側の拠点コーディネーターであるサイモン・フレージャー大学の NICHOLAS George 教授（7-1）を中心にカナダ側の拠点メンバーによって組織運営する。またアメリカの協力研究者がセミナー企画を支援する。日本側の参加者については、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの拠点事務局が参加者の取りまとめ、海外派遣の手続きを行う。</p>	
開催経費 分担内容	日本側	<p>内容 日本側研究者 国際航空運賃 日本側研究者 相手国内滞在費</p>
	イギリス側	<p>内容 イギリス側研究者 国際航空運賃 イギリス側研究者 カナダ国内滞在費</p>
	スウェーデン側	<p>内容 スウェーデン側研究者 国際航空運賃 スウェーデン側研究者 カナダ国内滞在費</p>
	オランダ側	<p>内容 オランダ側研究者 国際航空運賃 オランダ側研究者 カナダ国内滞在費</p>
	台湾側	<p>内容 台湾側研究者 国際航空運賃 台湾側研究者 カナダ国内滞在費</p>
	オーストラリア側	<p>内容 オーストラリア側研究者 国際航空運賃 オーストラリア側研究者 カナダ国内滞在費</p>
	カナダ側	<p>内容 カナダ側研究者 カナダ国内旅費 セミナー開催経費</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「移住と文化統合」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program "Migration and Cultural Integration"
開催期間	平成30年11月16日 ~ 平成30年11月19日 (4日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) スウェーデン、ウプサラ、ウプサラ大学
	(英文) Uppsala University, Uppsala, Sweden
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授・1-1
	(英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University・Professor・1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) PRICE Neil・Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University・Professor・3-1

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (スウェーデン)		備考
		A.	B.	
日本	A.	8/	64	
	B.	0		
イギリス	A.	2/	12	
	B.	0		
スウェーデン	A.	15/	60	
	B.	10		
オランダ	A.	1/	6	
	B.	0		
台湾	A.	1/	8	
	B.	0		
合計 <人/人日>	A.	27/	150/	
	B.	10		

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※人/人日は、2/14(=2人を7日間ずつ計14日間派遣する)のように記載してください。

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい



場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーの目的は、本事業の研究テーマの一つである「人類の文化的行動としての移住・適応・統合」を検討するために、北欧地域における重要な課題である先住民族サーミの歴史的形成過程と中世ヨーロッパにおける民族移住期とその後のスカンディナヴィアン（ヴァイキング）の拡散移住行動の多様性を議論することにある。合わせてほぼ同時期に極東アジアや他の地域において生じた大規模な人類集団の移住拡散行動とその後の文化および集団統合についての比較検討をおこなう。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>ヨーロッパにおける民族移住期はかねてより広く知られた歴史的現象であるが、その背景にある要因、またこの現象が生じた時期に地球上の他の地域でどのような類似した現象が生じていたのかについては、具体的に検討されてきてはいない。ヨーロッパとアジア、他の地域との比較によってこの現象が人類史上においてもつ意味を再検討することが可能となる。また各地の先住民族形成の背景にある民族接触と集団アイデンティティ形成の要因についてもグローバルな視野からの比較が可能となる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、スウェーデン側の拠点コーディネーターであるウプサラ大学のPRICE Neil 教授を中心にスウェーデン側の拠点メンバーによって組織運営する。日本側の参加者については、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの拠点事務局が参加者の取りまとめ、海外派遣の手続きを行う。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 日本側研究者 国際航空運賃</p>
	<p>イギリス側</p>	<p>内容 イギリス側研究者 国際航空運賃 イギリス側研究者 スウェーデン国内滞在費</p>
	<p>スウェーデン側</p>	<p>内容 スウェーデン側研究者 相手国内滞在費 日本側研究者 スウェーデン国内滞在費 セミナー開催経費</p>
	<p>オランダ側</p>	<p>内容 オランダ側研究者 国際航空運賃 オランダ側研究者 スウェーデン国内滞在費</p>
	<p>台湾側</p>	<p>内容 台湾側研究者 国際航空運賃 台湾側研究者 スウェーデン国内滞在費</p>

整理番号	S-4
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「先住性：考古学と人類学からの視座」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program "Dialogue of Indigeneity: Perspectives from Archaeology and Anthropology"
開催期間	平成31年3月8日 ~ 平成31年3月11日 (4日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) イギリス、オックスフォード、オックスフォード大学
	(英文) University of Oxford, Oxford, UK
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授・1-1
	(英文) KATO Hirofumi・Center for Ainu and Indigenous Studies・Professor・1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) GOSDEN Chris・Institute of Archaeology, University of Oxford・Professor・2-1

#### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (イギリス)		備考
		A.	B.	
日本	A.	10/	80	
	B.	0		
イギリス	A.	20/	80	
	B.	10		
スウェーデン	A.	3/	18	
	B.	0		
オランダ	A.	2/	12	
	B.	0		
台湾	A.	3/	24	
	B.	0		
オーストラリア	A.	2/	16	
	B.	0		
カナダ	A.	2/	16	
	B.	0		
ロシア	A.	2/	16	
	B.	0		
合計 〈人/人日〉	A.	44/	262	
	B.	10		

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※人／人日は、2／14（＝2人を7日間ずつ計14日間派遣する）のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーの目的は、人類学と考古学双方の視点から先住性の概念と課題を具体的な歴史的現象も基礎としながら比較検討することにある。先住性については、先住集団と新たな渡来者との関係が明確な地域と、歴史的な経緯から先住集団と渡来者集団との関係を明確に区分できない地域とが存在する。これまでも個別に議論されることの多かった先住性概念を複眼的な視点から議論する点に本セミナーの意義がある。セミナーでは、具体的に日本列島とブリテン島を中心に島嶼環境における集団移住に焦点をあて、文化的統合の中での先住性概念の意義と課題を議論する。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>本セミナーでの先住性をめぐる人類学と考古学領域からの議論を通して、先住性概念の多様性が明らかになることが期待される。また他地域の事例を有する研究者間の議論を通じて、ブリテン島と日本列島、さらに他の地域における島嶼環境のもつ地理的、社会的特性が明らかとなることが期待できる。また本セミナーでは若手研究者の研究報告の機会を独立して設定する。この機会を利用して、若手研究者の研究機関を移動し、研究指導をうける機会を提供するほか、新たな共同研究の芽や共同論文企画が生まれることが期待できる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、イギリス側の拠点コーディネーターであるオックスフォード大学のGOSDEN Chris教授を中心にイギリス側の拠点メンバーによってセミナーを組織運営する。日本側の参加者については、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの拠点事務局が参加者の取りまとめ、海外派遣の手続きを行う。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 日本側研究者 国際航空運賃 日本側研究者 相手国内滞在費</p>
	<p>イギリス側</p>	<p>内容 イギリス側研究者 イギリス国内滞在費 セミナー開催経費</p>
	<p>スウェーデン側</p>	<p>内容 スウェーデン側研究者 国際航空運賃 スウェーデン側研究者 イギリス国内滞在費</p>

オランダ側	内容	オランダ側研究者 国際航空運賃 オランダ側研究者 イギリス国内滞在費
台湾側	内容	台湾側研究者 国際航空運賃 台湾側研究者 イギリス国内滞在費
オーストラリア側	内容	オーストラリア側研究者 国際航空運賃 オーストラリア側研究者 イギリス国内滞在費
カナダ側	内容	カナダ側研究者 国際航空運賃 カナダ側研究者 イギリス国内滞在費
ロシア側	内容	ロシア側研究者 国際航空運賃 ロシア側研究者 イギリス国内滞在費

### 8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

所属・職名 派遣者氏名・研究者番号	派遣時期 (●月・●日間)	訪問先・内容
北海道大学・教授・ 加藤博文・1-1	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
北海道大学・教授・ 山内太郎・1-2	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
北海道大学・准教授・ 久保大輔・1-5	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
北海道大学・博士研究員・ 平澤悠・1-8	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
北海道大学・助教・ 近藤祉秋・1-9	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
琉球大学・准教授・ 木村亮介・1-12	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
琉球大学・博士研究員・ 澤藤りかい・1-13	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度全体会議に参加のため
同志社女子大学・教授・	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス

大西秀之・1-21		内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
国立民族学博物館・ 教授・野林厚志・1-22	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
金沢大学・助教・ 佐藤丈寛・1-23	4月・2日間	訪問先：北海道大学東京オフィス 内容：平成30年度第1回日本側全体会議に参加のため
若手研究者短期派遣プログラム（派遣者未定） 2018年4月のプロジェクトスタート後に公募予定	9月・14日間	訪問先：オーストラリア・オーストラリア国立大学 内容：先住民研究ワークショップ参加と文化遺産返還プログラムのインターンシップ参加
若手研究者短期派遣プログラム（派遣者未定） 2018年4月のプロジェクトスタート後に公募予定	9月・14日間	訪問先：カナダ・サイモン・フレーザー大学 内容：先住民文化遺産の所有権、研究機関所有資料の共同管理に関するワークショップ参加

※1名につき1行で記入してください。

#### 8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

事業計画初年度であり該当しない。

## 9. 平成30年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣 派遣元	日本 <人/人日>	イギリス <人/人日>	スウェーデン <人/人日>	オランダ <人/人日>	台湾 <人/人日>	オーストラリア <人/人日>	カナダ <人/人日>	ロシア <人/人日>	合計 <人/人日>
日本 <人/人日>		12 / 117 ( 0 / 0 )	9 / 94 ( 0 / 0 )	1 / 7 ( 0 / 0 )	1 / 30 ( 0 / 0 )	1 / 14 ( 0 / 0 )	7 / 56 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 30 )	31 / 318 ( 1 / 30 )
イギリス <人/人日>	0 / 0 ( 5 / 120 )		0 / 0 ( 2 / 12 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 2 / 14 )	0 / 0 ( 2 / 20 )	0 / 0 ( 11 / 196 )
スウェーデン <人/人日>	3 / 59 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 3 / 12 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 2 / 14 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	3 / 59 ( 5 / 26 )
オランダ <人/人日>	0 / 0 ( 3 / 59 )	0 / 0 ( 2 / 8 )	0 / 0 ( 1 / 6 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 1 / 7 )	0 / 0 ( 1 / 7 )	0 / 0 ( 8 / 87 )
台湾 <人/人日>	0 / 0 ( 6 / 137 )	0 / 0 ( 3 / 12 )	0 / 0 ( 1 / 8 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 2 / 14 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 12 / 171 )
オーストラリア <人/人日>	0 / 0 ( 2 / 52 )	0 / 0 ( 3 / 12 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 2 / 14 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 7 / 28 )
カナダ <人/人日>	0 / 0 ( 3 / 78 )	0 / 0 ( 2 / 8 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 5 / 86 )
ロシア <人/人日>	0 / 0 ( 6 / 137 )	0 / 0 ( 2 / 8 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )	0 / 0 ( 0 / 0 )		0 / 0 ( 8 / 145 )
合計 <人/人日>	3 / 59 ( 25 / 583 )	12 / 67 ( 15 / 60 )	9 / 64 ( 4 / 16 )	1 / 7 ( 0 / 0 )	1 / 30 ( 0 / 0 )	1 / 14 ( 0 / 0 )	7 / 32 ( 9 / 63 )	0 / 0 ( 4 / 57 )	34 / 377 ( 57 / 789 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

※相手国以外の国へ派遣する場合、国名に続けて(第三国)と記入してください。

### 9-2 国内での交流計画

	交流予定人数 <人/人日>
合計	10 / 20 ( 10 / 20 )

## 10. 平成30年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	3,100,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	9,080,000	
	謝金	0	
	備品・消耗品購入費	700,000	
	その他の経費	620,000	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	0	
	計	13,500,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,350,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		14,850,000	